

歴史民俗資料館特別展

屏風祭

—池田の文化をひらく— その1

歴史民俗資料館では、10月15日(土)から12月4日(日)まで、「屏風」をテーマに池田の文化を振り返る特別展を開催します。8月号から4回にわたり、展示の内容をご紹介します。

屏風ってなに？

初回は、そもそも屏風とは何か、ということに触れてみたいと思います。屏風の本来の用途は、風よけや室内の間仕切りのための家具です。「屏」という言葉には、「遮る、塞ぐ、防ぐ」という意味があり、「風」を「屏(ふせぐ)」調度品が、「屏風」であるといえます。その造りは、木枠に和紙や布を貼り込んだ縦長のパネルが連結されたものです。パネルの面は、扇のように自在に広げたり畳んだりできることから、「扇(せん)」と呼ばれます。屏風で最も一般的な形式は、6つの扇を連ねた「六曲」です。対になる二隻

の屏風を「一双」と数え、現存する室町時代から江戸時代にかけての屏風のほとんどが「六曲一双」のスタイルです。

屏風の最大の特徴は、折り畳みが可能であるということです。持ち運びや保管が容易にでき、使用しないときは収納しておくことができます。一方で、広げれば大画面の絵画となり、広い部屋を仕切りたいたいときや、部屋の雰囲気を変えたいときなどには、空間を一変させる効果を持ちます。

屏風のある空間

屏風は、どの時代、どのような空間で用いられたのでしょうか。

もともと中国では床(ベッド)の後ろに置く風よけの家具として用いられました。飛鳥時代、朝鮮半島にあった新羅の国の使者から天武天皇へ献上物として捧げられたという記録が残っており、その頃の屏風は衝立のようなものでした。平安時代、「源氏物語絵巻」をはじめとする絵巻物には、貴族の邸内で、風よけや間仕切り、高貴な人びとを他の人びとの視線から遮るための道具として、屏風が用いられた様子が描かれています。

おいて、広大な空間を襖絵とともに彩った屏風は、富と権力の象徴であったといえるでしょう。

江戸時代には、政権のお抱え絵師であった狩野派のほか、新興の町絵師たちも屏風を制作するようになり、町人文化の隆盛とともに、さまざまな形式・画題の屏風が制作されました。

それでは、現在結婚式場や旅館などで調度として使用されている屏風と、美術品として展示されている屏風との差はどこにあるのでしょうか。

近世以前は、もともと家具や調度品として作られたものが、歴史上の重要性や希少性から、美術品と同等の価値を持つようになったといえます。

一方、近代以降は、作家自身が展覧会での発表を前提に制作するようになります。それらは、初めから美術品として位置づけられるでしょう。

いずれにせよ屏風は、しつらえた場所に特別な意味を持たせるものとして機能してきました。本展では、近世・近代の池田で、調度として用いられた屏風を中心に、池田の文化を象徴する美術品も展示します。資料館で屏風の前に立ち、ひらかれた池田の文化を体感してください。



▲須磨対水《四季草花図屏風》(六曲一双)
大正時代ごろ 歴史民俗資料館蔵

◆問い合わせは歴史民俗資料館
☎751・3019